

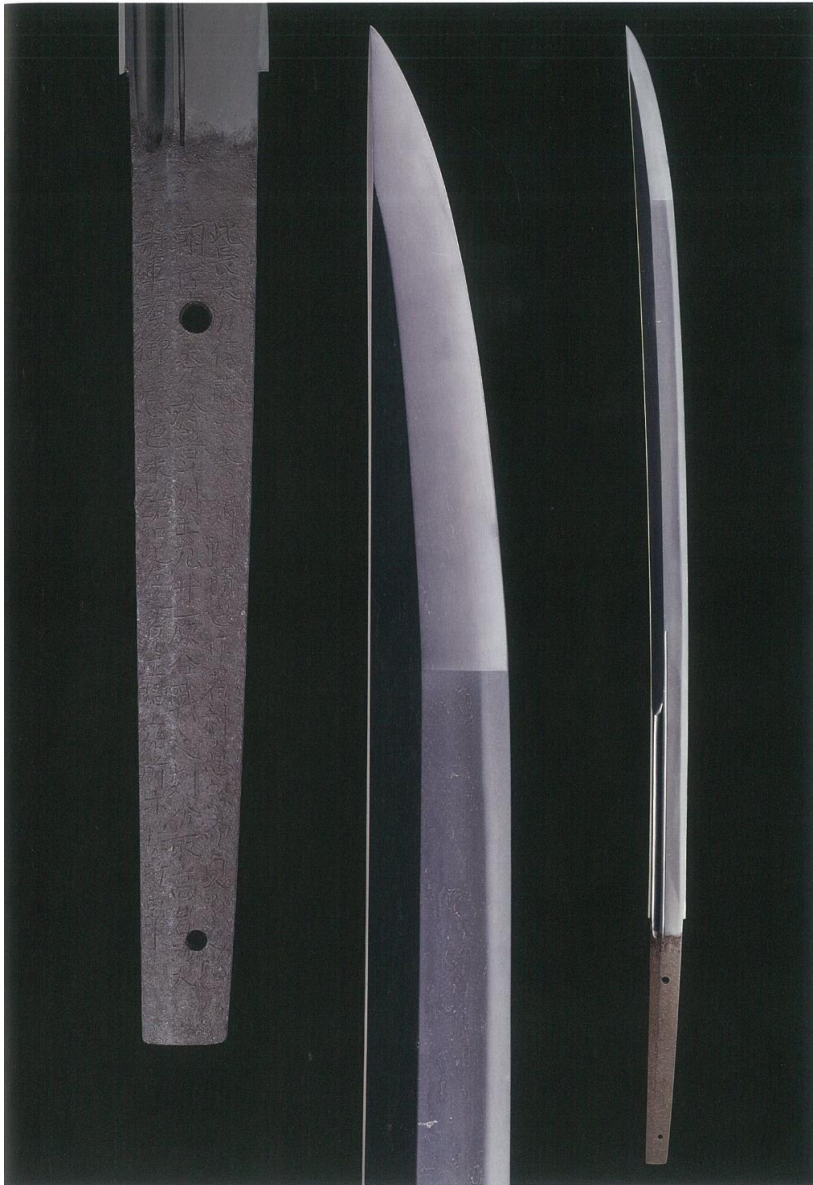


けぬきがたのたち
毛抜形太刀（伝^{ふじわらのひでさと}藤原秀郷佩用）【重要文化財】

長さ 70.9cm 反り 2.0cm 10世紀平安時代中期

平安時代より用いられた衛府（禁裏の警備をつかさどった役所）の官人が佩用する太刀。柄に毛抜きを向かい合わせにしたような透かしがあることからこの名称がある。本資料は初期の兵仗用で、刀身・拵ともにほぼ完全な状態で伝えられ、その構造が知られる唯一の遺例として大変希少である。平安時代の武人・藤原秀郷の佩用品と伝える。秀郷は天慶三年（940）平将門の乱を平らげた功によって鎮守府将軍となる。弓術に秀で、むかで退治などの英雄伝説が多い。

太刀は秀郷の子孫が伊勢国に携行したと伝える。山田の御師・深井氏の所有となり、享保年間に研磨されて将軍・徳川吉宗の上覧に供せられた。その後、荒木田・度会両神主が相談して豊宮崎文庫に奉納。明治44年（1911）に神苑会が譲り受けて当館に収蔵された。



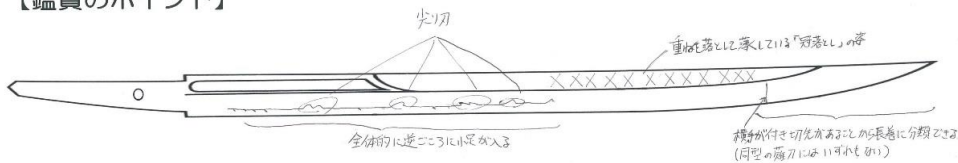
太刀 無銘 (伝 神息)

太刀 裏に切付銘あり (伝 神息 号 蜈蚣切)

長さ 78.5 cm 反り 0.9 cm 10 世紀平安時代中期に製作と伝える

明和2年(1765)4月濱地重郎兵衛重興が内宮に奉納。

【鑑賞のポイント】



刃文：沸出来の直刃調小乱刃。所々に尖り刃入る 鍛え肌：板目肌立つ 切先：大鋒延び長大。乱れ込み焼詰

神息は豊前鍛冶で宇佐郡に住む社僧と伝える。奈良時代にその名があり、九州鍛冶の源流をなす存在として名跡が数代に亘ったとされる。本資料は 13 世紀の南北朝時代に製作された長巻を刀に直したものとみられる。伝承には検討の余地があるが、切付銘も同時代のものであり、秀郷の英雄譚が古くから語られていたことが分かる。

太刀 銘 有國 (折返銘) 【重要文化財】

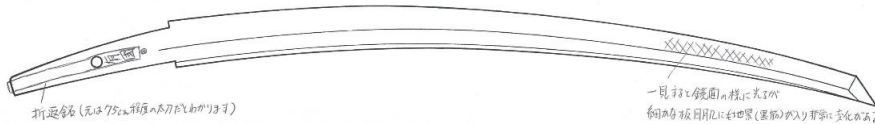


太刀 銘 ^{ありくに}有國 (折返銘) 【重要文化財】 附 ^{くろうるしまき えうちがなこしらえ}黒漆蒔絵打刀拵

長さ 57.0 cm 反り 1.5 cm 13世紀鎌倉前期に製作 研磨：藤代松雄（昭和49年）

昭和20年（1945）5月13日名古屋市の個人が徴古館に寄贈。

【鑑賞のポイント】



刃文：細直刃 鍛え肌：小板目よく詰み、精緻に地景入る 切先：小鋒・小丸に返る
有國は、山城鍛冶で栗田口派の刀工。栗田口派は京都の東玄関に当たる栗田口一帯に居を構えていた集団で、兄弟3人は後鳥羽院の招聘を請けた「御番鍛冶」である。長兄・國友の作風によく似るとされているが現存数は極めて少なく、在銘確実な作刀は当館所蔵の太刀のみである。昭和14年（1939）重要美術品、昭和28年（1953）国の重要文化財に指定された。

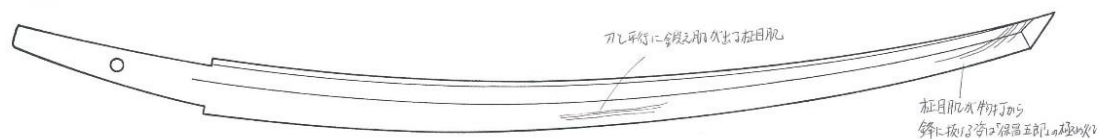


太刀 無銘（大和 保昌派）^{ほうしょう}

長さ 74.0 cm 反り 2.3 cm 14 世紀鎌倉時代後期 研磨：高岩節夫（平成 27 年）

元禄 8 年（1694）5 月金沢藩士・永原左京孝寛が外宮に奉納（代参）。

【鑑賞のポイント】



刃文：小沸出来の直刃 鍛え肌：刃縁に柱目肌。鑄寄り板目流れる 切先：猪首鋒・少し返る
無銘であるが、当時の折り紙で「保昌五郎」と極められている。保昌五郎は、鎌倉時代後期（14世紀）の大和鍛冶で保昌派の刀工「貞吉」を指すとされる（一説には大和保昌派の上位刀工の総称とも）。保昌派は顕著な柱目鍛えの地鉄に特色があり、また居住地（大和国高市郡）、製作年次、姓や官職名を銘に切るなど、大和伝でも個性的な作風を示している。



短刀 銘 (表) 加州藤原家次作 (裏) 三州圓光

短刀 (表) 加州藤原家次作 (裏) 三州圓光

長さ 26.1 cm 反り 無し 16世紀室町時代中期に製作

元禄7年(1694)9月26日五代将軍徳川綱吉の生母・桂昌院が内宮に奉納(代参)

【鑑賞のポイント】



刃文：小沸出来。刃中の働き激しく砂流し頼りにかかる 鍛え肌：板目肌立つ 切先：大鋒延び、掃きかけて返る
家次は加賀鍛冶で加賀青江派の刀工。同派は逆がかかる 丁子刃の作風が備中鍛冶・青江派に似ることから称され、本資料にも特徴が顕れている。これまでは家次と圓光との合作とされていたが、圓光なる刀工の作は本資料以外になく、これまでの刀剣書にも現れていない。三河国・圓光という人物が所持したことを示す可能性もある。

短刀 銘 家正

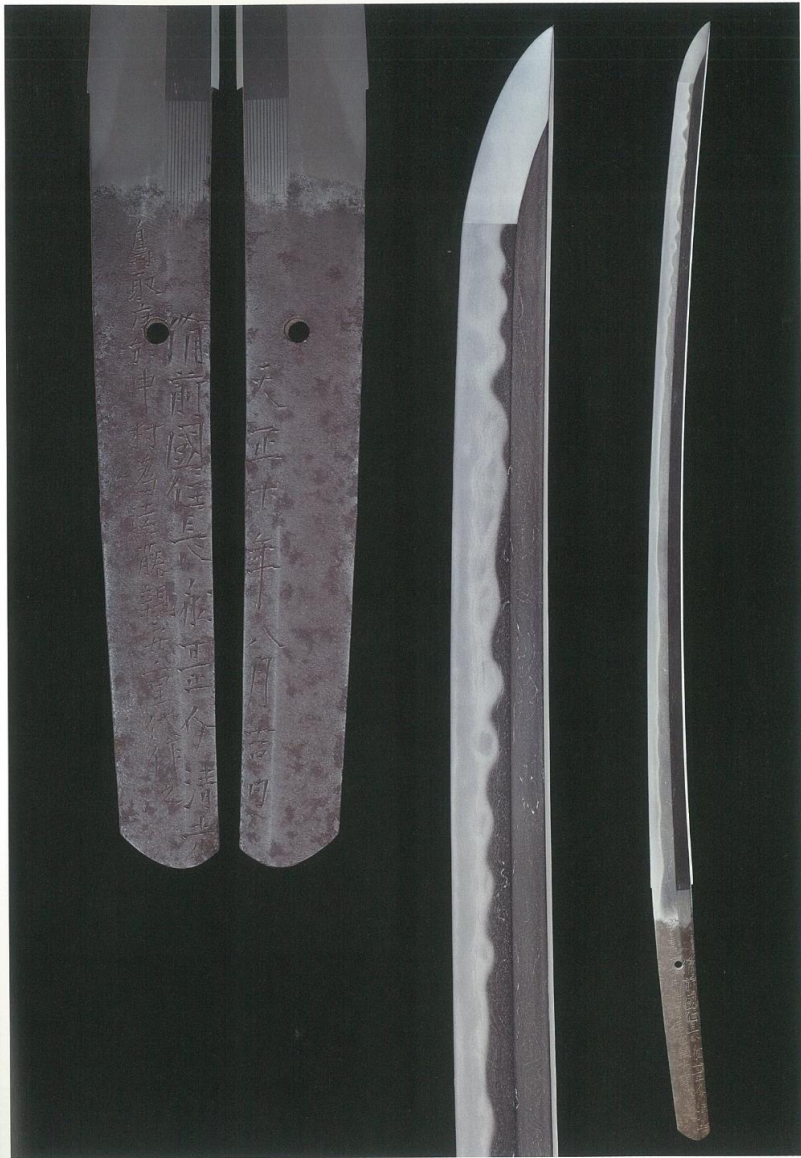
長さ 30.6 cm 反り 0.1 cm 16世紀室町時代中期に製作 研磨：三品謙次(平成18年)

元禄7年(1694)9月27日五代将軍徳川綱吉の生母・桂昌院が外宮に奉納(代参)

【鑑賞のポイント】



刃文：匂出来の小乱刃 鍛え肌：板目肌流れどころに立つ 切先：中丸に返る
家正は加賀鍛冶で千代鶴派の刀工。千代鶴派は大和から美濃を経由して越前・加賀に移ったとされる。『銘鑑』には家正に五代の代別があるが、本資料は代が下がると見られる。出来は荒々しく同派の作風をよく示すとともに、世に伝わる桂昌院の人柄が偲ばれるようである。



刀 銘(表)備前國住長船甚介清光 鳥取庄於中村為法一藤親安重代作之(裏) 天正十年八月吉日

刀 銘(表)備前國住長船甚介清光

と とりしょうなかむらにおいてほういつとうちかやすちょうだいとしてこれをつくる
鳥取庄於中村為法一藤親安重代作之

てんしょうじゅうねんはちがつきちじつ
(裏)天正十年八月吉日

長さ 65.3 cm 反り 1.5 cm 16世紀安土桃山時代

享保19年(1734)7月8日金沢藩士・永原式部孝之が外宮に奉納(代参)。

【鑑賞のポイント】



刃文：刃中の働き激しく、物打刃りは砂流し頻りにかかる 鍛え肌：板目肌立つ 切先：中鋒延び、大きく乱れ込み返る
清光は備前鍛冶で長船派の刀工。室町時代後期に多数あり、工房的な性格を有していたとされる。甚介はその一人と見られ、本資料は注文作であり出来がよい。

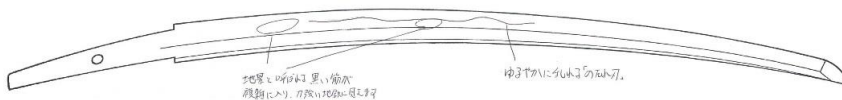


刀銘 國廣

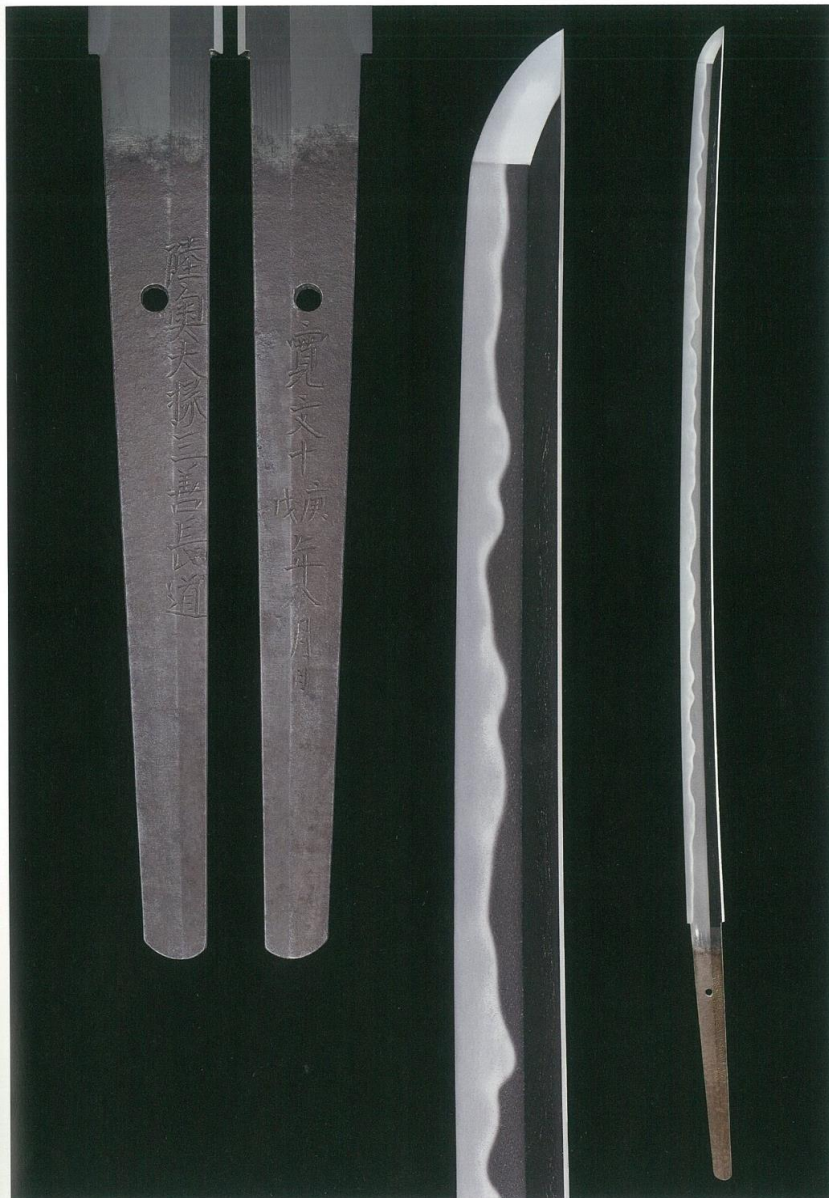
長さ 75.6 cm 反り 2.3 cm 16世紀安土桃山時代に製作 研磨：藤代興里(平成27年)

安政2年(1855)4月彦根藩主・井伊直弼が内宮に奉納(代参)

【鑑賞のポイント】



刃文：沸出来の直刃でやや湾れる 鍛え肌：小板目肌詰み、地沸・地景入る 切先：中鋒。一枚帽子
 國廣は日向国飫肥の生まれ。伊東家の家臣の武士だったが、同家没落後は山伏となつて諸国を流浪し鍛刀した。慶長4年(1599)以降は京都の一条堀川に定住。豊臣家の庇護を受けて作刀に励み、また多くの子弟を養成していわゆる「堀川物」という特色ある作風を樹立。新刀の祖とされている。慶長19年(1614)に84歳で死去。



刀 銘 (表) 陸奥大掾三善長道 (裏) 寛文十庚戌年八月日

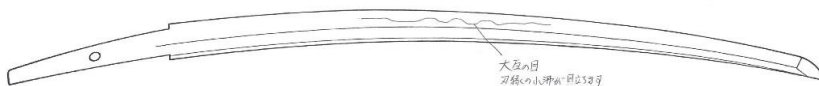
刀 銘 (表) 陸奥大掾三善長道

(裏) 寛文十庚戌年八月日

長さ 75.6 cm 反り 1.0 cm 17世紀江戸時代前期に製作 研磨:三品謙次(平成 18年)

嘉永7年(1854)11月彦根藩主・井伊直弼が外宮に奉納(代参)

【鑑賞のポイント】



刃文:沸出来の大互の目乱れ 鍛え肌:小板目詰み、地沸厚い 切先:小鋒。中丸に返る
 長道は寛永 10 年(1633)生まれ。通称・藤四郎。会津藩抱工の叔父・長俊に師事。
 萬治 2 年(1659) 陸奥大掾に任ぜられ「長道」と改銘。貞享 2 年(1685) 53
 歳で死去。三善家は初め伊予国松山の加藤嘉明に抱えられ、同家の会津転封に従い同
 地で作刀。最上大業物に位置づけられている。